

# Glocal Tenri

月刊 グローカル天理 Monthly Bulletin Vol.24 No.2 February 2023

天理大学 おやさと研究所 Oyasato Institute for the Study of Religion, Tenri University



2

## CONTENTS

- ・巻頭言  
宗教学と神学の間  
／井上 昭洋 ..... 1
- ・文脈で読む「身上さとし」(5)  
おさづけ拜戴のあと  
／深谷 耕治 ..... 2
- ・伝道と翻訳—受容と変容の“はざま”  
で— (39)  
天理教教義翻訳の諸相 ⑥  
／成田 道広 ..... 3
- ・英語文献にみる天理教 (2)  
*The Japan Weekly Mail*  
／尾上 貴行 ..... 4
- ・特別寄稿  
おやさと研究所滞在記  
／邱 淑雯 ..... 5
- ・音のちから—中国古代の人と音楽 (12)  
出土楽器が語る音の世界—骨笛—  
／中 純子 ..... 6
- ・ヴァチカン便り (60)  
法王の辞任問題について  
／山口 英雄 ..... 7
- ・天理参考館から (30)  
「兎に角」、「脱兎のごとく」飛躍する  
卯年になりますように  
／幡鎌 真理 ..... 8
- ・思案・試案・私案  
「碍」の字表記問題再考 (23)  
仏教にみる障害者像  
／八木 三郎 ..... 9
- ・2022 年度公開教学講座要旨：『逸話篇』  
に学ぶ (8)  
第5講：119「遠方から子供が」  
／森 洋明 ..... 10
- ・2022 年度公開教学講座要旨：『逸話篇』  
に学ぶ (8)  
第6講：126「講社のめどに」  
／堀内 みどり ..... 11
- ・おやさと研究所ニュース ..... 12  
第354回研究報告会 (12月12日) /  
「国際会議：井筒俊彦の東洋哲学を再  
定置する」を開催 (12月17、18日)  
／2022年度おやさと研究所特別講座  
「教学と現代」

## 巻頭言

## 宗教学と神学の間

おやさと研究所長 井上昭洋 Akihiro Inoue

前号で、カナダの宗教学者である Noll 准教授による神学批判を紹介したが、もう少し彼の提起した問題について考えてみたい。彼の考える学問としての宗教学は、自然科学をモデルとした安易な客観主義に基づく宗教学と言ってよいだろう。彼の議論には多くの問題点を指摘することができるが、ここでは彼の提示した「宗教学」と「神学」の対比に的を絞って検討してみたい。

「生物学者と実験室のカエル」の喩えに見るように、彼の宗教学者と神学者の対比は、「宗教を研究する宗教学者」対「宗教を実践し擁護する神学者」といった単純化された図式の中でなされる。彼の対比は「宗教の外側にいる者」と「宗教の内側にいる者」との対比、すなわち「自分の信仰を棚上げして宗教を扱う者」と「信仰者として自らの宗教を扱う者」との対比と言ってよいかもしれない。勿論、彼の描く図式では、前者が宗教学者であり、後者が神学者ということになる。

しかし、彼の議論は、彼の抱く理想的な研究者としての宗教学者像と批判の対象として設えられた神学者像を対比しているに過ぎない。彼が「宗教を実践し擁護する神学者」と言う時、その神学者は限りなく宗教家に近い存在であり、学問としての神学を営む者（神学者）と宗教を信仰しその教義に精通する者（宗教家）の区別が極めて曖昧になっている。だが、ここでなされるべきは「宗教学を営む者」と「神学を営む者」との対比であって、「宗教を研究する者」と「宗教を信仰する者」との対比ではなかったはずである。

神学者と宗教家の間に境界線を引くことは確かに難しい。しかし、両者の違いに十分に注意を払わずに論じたがために、彼の「生物学者とカエル」の比喩は議論の始

りと終わりで齟齬をきたしてしまう。初めに「宗教研究者（宗教学者）と神学者」の関係を「生物学者とカエル」の关系到喩えたはずが、宗教研究者の研究対象が神学から宗教それ自体にすり替わってしまい、生物学者がカエルを解剖するように宗教研究者が宗教やその信仰体系を解剖すると論じてしまっているのだ。「生物学者とカエル」が「観察者と被観察者」の比喩を意図していたとすれば、それは「宗教研究者と神学者」の関係より「宗教研究者と信仰者（宗教家）」の関係を説明するのに適した喩えであったと考える方が適切であろう。

Noll 准教授は、宗教を信仰することと神学を営むことを同一視したまま、宗教学と神学の関係を論ずることになってしまった。しかし、宗教学と神学を比較するのであれば、「学問」としての神学とは何かを明確にしておく必要がある。さらに、「神学」と「信仰」という2つの営為の関係についても慎重に検討するべきであろう。ここで浮上してくるのは、信仰は神学にとって必要か？ という問いでもある。これらの問題は、神学の分野に限らず、研究者が自らの信仰する宗教を己の学問によって研究する際に対峙しなければならない問題であるはずだ。

彼は、大学のホームページの自己紹介欄で「学生には宗教に対する個人的な関わり合いから一步退いて、宗教一般についての問いかけをするように指導している」と述べる。これは、対象から離れて客観的にそれを研究することが学問のあるべき姿であるという主張である。だが、彼の客観主義的宗教学は、宗教学者が自らの信仰する宗教を研究する際の困難性について（彼の比喩を借りれば、生物学者が自らを開腹し、その中を弄するという苦痛や苦悩について）、全く関知しない。

## おさづけ拝戴のあと

明治20年頃の「おさしづ」の主題は、本席の立場を明確にすることであった。本席は「おさしづ」を伝える者であり、おさづけの理を渡す者である。増野正兵衛は、本席の側近として、その言葉を取り次ぐという重大な役割を担っており、正兵衛自身もこの頃におさづけの理を拝戴している。以下、おさづけの理を拝戴した後の正兵衛に関する「おさしづ」を見ていきたい。

増野正兵衛は、明治20年5月14日(陰暦4月22日)におさづけの理を拝戴した。その後も、自身の身上の障りを通して断続的に「おさしづ」を伺っている。5月から7月までの割書きは以下の通りである。

- ・明治20年5月16日(陰暦4月24日): 増野正兵衛身上障り伺
- ・5月20日(陰暦4月28日)頃: 増野正兵衛伺
- ・6月24日(陰暦5月4日): 増野正兵衛身上伺
- ・6月28日(陰暦5月8日)八時十分: 増野正兵衛身上障り伺
- ・7月3日(陰暦5月13日): 増野正兵衛伺
- ・7月4日(陰暦5月14日): 増野正兵衛伺
- ・7月13日(陰暦5月23日): 増野正兵衛足首の伺
- ・7月17日(陰暦5月27日): 増野正兵衛右の腹痛み伺
- ・7月20日(陰暦5月30日): 増野正兵衛身上障り伺
- ・7月23日(陰暦6月3日): 増野正兵衛体内あちらこちら疼くに付伺。神戸へ帰る事に付伺。春野千代身上悩みに付伺
- ・7月26日(陰暦6月6日): 増野正兵衛身上障り伺

これら一連の「おさしづ」について、気づいた点を順に記していきたい。

明治20年5月16日の「おさしづ」では、正兵衛の身上の障りについて、「心に掛かるは、めんへ身に掛かる」と、定めた心を動かさないようにと諭されている。

6月24日の「おさしづ」では、「取次」について述べられた箇所、「成程の道、こうなる纏まり、談示々々水の席火が出る、火の席に水が出る。そこで水の席に水、火の席に火を以て、いかなる処、談じ置かねばならん」とある。神の言葉には万人に通じる普遍性があるが、それを取り次ぐ場面では「水の席に水、火の席に火」と、聞き手に応じた取り次ぎ方が説かれている。

6月28日では、「さあへ分らん処には、何ぼ誠説いても誠とせん。何ぼ貫ぬこうと思うても、関があつては登れん」と、神の話を「誠」として受け取らない人の場合について述べられている。そうした人の心には「関所」のようなものがあるが、「関は神が取るのやで。関さえ取れば、登れるであろう」と説いて、取次者が根気よく話を取り次ぐことが促されている。

7月4日の「おさしづ」では、「道の道なら道のため一つ思案、

なれども案じが強うてならん」と、道のために思案する中に、先案じの心が強くあることを指摘されている。

7月13日頃、正兵衛は足首を痛めたようである。そのことについて伺うと「身の内だんへ身の障り、尋ね事情、身障り、中の一つ治め方、だんへ障り知らせてある」と、身上の障りを通して、神意を読み取るようにと諭されている。

その4日後の7月17日に右腹が痛み出したことに対しては、「どういふ事、どうかこうか治まる処分かり難ない」や「内なる処又日いかなる処の心もある」と、内々の者に神の話を伝えて納得してもらえる日もあれば、そうでない日もあることが伝えられている。

7月20日の「おさしづ」では、「又一々その所、めんへ国一つ長くへ心ある尋ねから、談示一つ処纏まらねばならん」と、国元の人々との談じ合いをまとめるようにと諭されている。

7月23日では体内のあちらこちらが疼くことについて伺うと、「皆ひながた出してあるで。道々、通らにゃならん道が見える」とあり、ひながたの道を参照するように諭されている。また同日、神戸へ帰ることについて伺うと、「どのくらいの事、いかなる処ふでさきほんに聞いた通り」や「案じて案じ、案じには切りが無い」と、「おふでさき」についてふれながら、先案じする心について注意されている。

またこの日は、春野千代(正兵衛の妻いと義姉)の身上の悩みについても伺っている。「救けとうてへ、一つ道を通らねばならん。救けて貰いたいへ。一時救け出けん。」と、人をたすける心になるように促されていることがわかる。

7月26日、再び正兵衛の身上の障りに関して伺うと、「天然自然の道というものは、一つ踏んだら一つ、二つ踏んだら二つ、三つ踏んだら三つ。これは一寸も動かん。これが第一の処がある」と、天然自然の摂理にそって順序よく一步一步事を進めるようにと諭されている。

以上、増野正兵衛がおさづけを戴いた後、およそ2カ月の間の「おさしづ」について見てきた。この間のお言葉を全体的に見ると、家内の人々が神の道を歩むことに対して逡巡しており、正兵衛が心を砕いている様子が窺える。親神は、人々の先案じする心を再三指摘しつつも、あくまで皆が談じ合いながら心一つにすることを求められている。そして、その中心人物である正兵衛に何度も身上の障りを与えていると拝察される。

正兵衛自身おそらく気が急くこともあっただろう。7月26日の「天然自然の道というものは、一つ踏んだら一つ、二つ踏んだら二つ、三つ踏んだら三つ」というお言葉が印象深い。また、こうした一連の流れを踏まえるならば、6月24日の「そこで水の席に水、火の席に火を以て、いかなる処、談じ置かねばならん」と、前もって相手に応じて伝えることの大切さを伝えられていることも意義深く感じられる。

## 天理教教義翻訳の諸相 ⑥

## 昭和期(戦後)の教義翻訳 2

天理教教義翻訳において、教義的に重要な意味を有する語や、多義語であるが故に混乱をきたす語などはあえて訳さず、借用語として用いるために、その語音を転写し、不翻訳語(音写語)にする場合がある。その基準は教義翻訳における重要な論点の一つである。具体的には「天理王命」「かんろだい」「ちば」「しんばしら」「ひのきしん」「よふぼく」「さづけ」「月日」などがそれに相当し、その語義は教義の根幹に関わるものが多く、翻訳や通訳の場面でその扱いは特に慎重を期すことになる。翻訳という文書伝道による「教え」の受容と変容の実態を理解する上で、不翻訳語が各言語圏においてどのように受容され、その語義がどのように変容するのかを分析することは非常に重要である。

以前紹介した仏典翻訳における玄奘の「五種不翻」説は、そのような不翻訳語の扱いに関して、5つの項目によってその基準を明確に示しており、仏典の漢訳と中国における仏教受容に多大な影響を及ぼした。天理教教義翻訳研究会の井上昭夫代表は、原典翻訳に関する諸問題を具体的に考察する一例として、玄奘の「五種不翻」説をもとに、教義語不翻訳の条件について「天理教用語不翻訳の条件について一特に玄奘の「五種不翻」説に照らして」という論文の中で、次のように論じている。

まず、第一の「秘密の故に」は、「翻訳の対象となる言葉が深遠で、神秘的であり、世間一般の人間にとっては、とうてい理解できないと考えられた場合は、不完全な言葉を持って翻訳することはやめて原音のまま漢語で表現しようとする規定」であり、天理教の「天理王命」が該当する。

第二の「多含の故に」は、多義語の場合、一つの語義を選択し訳出すると、残りの語義が欠落してしまう場合、原音のまま音写すべきであるという規定であり、天理教の「ちば」や「理」などが該当する。

第三の「この方に無きが故に」は、「中国には存在していないものは、言葉がないので翻訳しないとする規定」で、天理教の「さづけ」「ひのきしん」「にをいがけ」「よふぼく」「てをどり」などが該当する。

第四の「古例に順うが故に」は、翻訳出来ないわけではないが、すでに音写語によって周知されている場合、その習慣を重んじてあえて翻訳しないという規定で、仏典翻訳に比べると、歴史の浅い天理教では、この項に該当する教語が見当たらないが、強いて挙げるならば「真柱」が該当する。

第五の「生善尊重の故に」は、「翻訳するとその言葉の価値を失い、第一義的な原意が、二義的な意味に解釈されるので、訳出はしないという規定」であり、天理教の「いんねん」や「よふきぐらし」などが該当する(井上, 1967:124-128)。

これらの視点をもとに、井上は「教語不翻訳の条件を考える場合、翻訳にともなう言語の持つ文化性を認識し、教語の定義と選択、一語多義教語の分析、不翻訳教語の原音表記法にまで、深く立ち入って研究することが大切である。」(井上, 1967:131)と述べ、不翻訳語の基準に関する問題提起を試みた。

教義翻訳における不翻訳語の扱いは、未だに悩ましい問題の一つであり、各言語圏ではある程度その線引きが定まってはいるものの、その分析と検討を継続している。そのような翻訳者の営為について、井上は「各教語にわたって翻訳上、語義の選択と分析

を続けていくと、日本語で思考している時には気付かない問題に屢々出くわすことがある。こういう場合に言えることは、忠実な翻訳者は翻訳するにあたって、その出会いの毎に、教語の定義という根源的な問題に立ち帰らざるを得ないと言う事である。」(井上, 1967:128)と述べている。翻訳者は宿命的に日本語原文における教義語の解釈とその定義を試みなければならない。その桎梏が故に、翻訳者はあたかも「匿名の教学者」のような存在でもあり、必然的にその資質が求められるといえよう。

さて、昭和27(1952)年に再設置された海外伝道部は、昭和43(1968)年に海外布教伝道部、さらに平成11(1999)年に海外部と改称された。昭和45(1970)年に設置された翻訳班は、昭和46(1971)年11月から寺田好和主任の指導の下、新たに翻訳活動を展開した。昭和51(1976)年4月には、翻訳班から翻訳課に改称され、寺田主任が初代翻訳課長に就任した。その後、翻訳課は、平成4(1992)年から上田嘉太郎課長、平成10(1998)年から山澤廣昭課長、平成13(2001)年から増野道太郎課長、平成21(2009)年から平野知三課長、平成24(2012)年から永尾比奈夫課長、平成28(2016)年から松田理治課長、令和3(2021)年から中山正直課長と、歴代課長の指導の下、翻訳通訳活動を担い、現在に至っている。

翻訳課の活動に関して寺田初代課長は、昭和51(1976)年10月26日発行の『海外布教伝道部報』140号の巻頭言で次のように記している。

教祖のお言葉には深い親の思いが込められてあり、一つの言葉の中からも深い悟りを求めるべきものであり、それは我々の心の成人に応じて進められてゆくものであるが故に、日本語の世界そのものの中にでも親の思いを求め続けねばならぬものであり、現在もその過程にあるだけに、その段階で翻訳を進める時には筆舌に尽きぬ緊張感がある。

翻訳の遂行に当たって大切な事は、現在の我々の成人の段階に於て、親の思いを求めさせて頂いた結果を、できるだけ正確に表現する事であり、かつ又、表現されたものが、その言葉を常用する人達にできるだけ正しく理解され、親の思いをできるだけ深く味わって頂けるものであらねばならない。どれほど立派な翻訳文章であっても、教理の本質を離れたものであってはならないし、その反面、翻訳されたものは、その言葉を使う人の心に生きるものでなくてはならないのである。

また、寺田初代課長は昭和57(1982)年2月26日発行の『海外布教伝道部報』204号の巻頭言で、「翻訳・通訳はおたすけである」と題して、「翻訳活動は、ただ単なる机上の御用ではない。教祖の思召しを各々の言語で伝えさせて頂き、進んでは教祖の親心を味わって頂いて、各言語圏の人々にたすかって頂かねばならぬ御用である。」と記し、信仰実践としての教義翻訳の意義を明確に示した。寺田初代課長の薫陶を受けた課員が減り、課員の顔ぶれも変わりつつあるが、教義翻訳の要諦を穿つ「翻訳・通訳はおたすけである」との箴言に籠る精神は、翻訳課の伝統としてこれからも変わることなく受け継がれていく。

[引用文献]

井上昭夫「天理教用語不翻訳の条件について一特に玄奘の「五種不翻」説に照らして一」『天理教学研究』17、天理教道友社、1967年、pp.122～134。

天理教に関する外国語文献として、「おふできき」や「みかぐらうた」などの原典の翻訳も含め、その歴史や教義などについての概説を試みた最初のもは、1895年(明治28年)発行の『日本アジア協会紀要』(Transactions of the Asiatic Society of Japan)で発表されたダニエル・クロスビー・グリーン(Daniel Crosby Greene)の研究論文「天理教一天の理の教え」(Tenrikyō; or the Teaching of the Heavenly Reason)であろう。この論文は、その後の外国人による天理教研究に関する第一級の基本資料となり、天理教という日本の新宗教を日本国外へ紹介するうえで大きな影響を与えたと考えられる。一方、このような学術論文ではないが、同時期の英字新聞やキリスト教関係の報告書などに、天理教に関する記述が散見されるようになった。今回は、グリーン論文が発表される1年前の1894年3月にThe Japan Weekly Mailに掲載された天理教に関する記事についてみていきたい。

The Japan Weekly Mail-A Review of Japanese Commerce, Politics, Literature, and Artは、1870年1月、横浜のJapan Mail社によって発行が開始された英国系英字新聞で、Japan Herald, Japan Gazetteとならび明治期の横浜における3大英字新聞の一つとされている。当初は、貿易や船舶、来日外国人、居留地での生活や文化の情報が中心であったが、のちに日本国内や海外のニュース報道が充実していった。その内容は、政治・経済・社会・文化面での日英間の相互交渉、日本に関する様々な事柄の紹介や時事問題など幅広い話題を扱い、当時の日本から欧米社会への情報発信において重要な役割を担ったとされている。また同紙は、グリーン論文が掲載された研究紀要の発行元である日本アジア協会の学会誌的な役割も果たし、欧米人のみた明治期の日本や日本における彼らの活動なども描くなど、当時の日本社会、日本と欧米諸国とのかわりなどを知る上で大変的価値の高い資料となっている。

天理教に関する記事が掲載された1894年3月3日づけのJapan Weekly Mailの紙面は、全部で32ページあり、主な内容は、日本の新聞紙上での主要記事のまとめ、社説、日本国外のニュース、日本の宗教関係の記事、海外通信、スポーツニュース、最新の電信記事、日本への海外からの来訪者に関する情報などであった。宗教に関する記事を扱った「Monthly Summary of the Religious Press」は約2ページにわたり、そのなかで天理教に関して約半ページ割かれている。この宗教欄は月初めの号に掲載されることが多く、日本で発行された宗教関係の新聞や雑誌から主なニュースを拾い、紹介している。日本でのキリスト教伝道に関する記事が多いが、仏教や神道に関する出来事も掲載されている。この3月3日号では、まずキリスト教に関する記事で、名古屋で開催された行事が大変盛況であり、日本人キリスト教信者の信仰熱が高まりつつあるとの報告がなされている。続いて、同様の信仰の高まりが、日本の下層階級の人々にもみられるとして、天理教について書かれている。その内容の大半は、佛教学会発行の雑誌『仏教』の明治27年2月5日号に掲載された「評林 一種の怪教」(43~47頁)を英語で要約したものととなっている。ちなみに、この『仏教』の記事は、日本国教大道社発行の『日本国教大道叢誌』66号(明治26年12月25日)の社説「論<sup>7</sup>天理教<sup>7</sup>」(1~16頁)を基にしている。この記事の大意は以下の通りである。

「天理教(Ten-ri-kyo, the Religion of Heavenly Truth)」は、数年前に大和で「prophetess(女性預言者)」によって開始され、現在日本全国に広がっており、その信者は熱心である。仏教系雑誌『佛

教』によれば、天理教信者の多くは「明らかに文明化されていない野蛮な人」である。ある天理教教師によれば、天理教にはクニトコタチ・ノ・ミコト、オモタリ・ノ・ミコトなど全部で十の神がいるが、実質的には多神教ではなく、これらの神々が一つになった一神教である。これは日本の古代神話によく似ており、女性預言者ナカヤマ・ミキは、古代神話に新たな解釈を加え、現代における神話を再生、創造した。この新しい神話が、信者の急激な増加の直接的理由となっているかは定かではない。この宗教が広まった理由は、「天から露の雨」が振ってくるという「素晴らしい光景(vision splendid)」が多く日本人の魂を高揚させ、「天の理(heavenly truth)」が信者の心を大和の聖地へと向かわせたためではないだろうか。ミキが生まれた大和は、イザナギとイザナミが最初に現れた場所であり、ミキが住む三島村は、この国、そして全人類の源である。「人類の始めと終わりは大和に繋がっている(The Alpha and Omega of humanity is connected with Yamato)」のだ。この教えはまず日本へ、そして海外へと広がっていく。短い宣教期間で日本に広がっており、これは人間業ではなく、奇跡である。やがて、天からの甘露が三島にある天理の寺に降り注ぎ、時が満ちた時、神から最上の守護が人間に与えられるのである。この天からの露に触れば、目の見えなかった人が目を開き、肺病が治るなど、あらゆる病気が根絶される。「そのような福音が、大和の女性預言者によって病める人々のまえに現れたのだ(Such is the gospel which the prophetess of Yamato has put before the suffering masses of her country people)」。この愚かさは否定できない、と『佛教』は言う。もし天理教が無力な狂信であれば、何も気にする必要はない。しかし、天理教は無力ではなく、日本中に広まっている。天理教寺院は新しく建てられ、参拝者であふれている。この新しい迷信の特徴である三味線と胡弓の音色はいたるところで聞かれ、熱狂的な信者が踊り、歌っている。日々の仕事はないがしろにされ、世間の秩序はみだされているのだ。『佛教』は、地方の行政担当者、教育者、僧侶に、この有害な迷信を止め、この狂信に対抗するように呼びかけている。『佛教』は、キリスト教神父にさえ、天理教の危機から日本人々を救うために協力するように呼びかけている。

明治26年6月に羽根田文明の『天輪王弁妄』が出版されて以来、天理教批判書が次々と出版され、多くの新聞社がこぞって批判記事を掲載していたが、『佛教』の記事もその流れの一つだと考えられる。The Japan Weekly Mailの記事は、基本的に『佛教』の記事を紹介する形で構成されており、同紙自身の意図がどこまで反映されているかは不明である。つまり、天理教に関してどのような評価をしているかは判然としない。しかし、信者増加の理由を「甘露」ではないかと推察している点などは、『佛教』には見られない。世間を騒がせている「邪教」天理教をただ批判する目的で掲載したというよりも、当時急速に信者数を獲得していた天理教に注目し、その理由を探ろうとしている様子がかがわかる。特に、日本で宣教活動を行う欧米人宣教師たちにとって、注目に値する存在になっていたことは確かであろう。事実、キリスト教宣教師による当時の日本の宗教事情に関する報告書のなかで天理教に言及するものも、この頃からしばしば見られるようになってきているのである。グリーンが天理教教会本部を訪問した明治27年4月が、丁度この記事が出たころであるというのも、非常に興味深い点である。次号以降、日本の文献からの引用だけではなく、欧米人の目でみた天理教に関する記述についてさらにみていくことにする。

私は2022年6月から3カ月間の夏休みを利用し、台湾科学技術部の海外短期研究補助金（補助科學與技術人員國外短期研究）で「戦後天理教台湾人女性布教師のおぢば帰り」を研究調査するため天理大学附属おやさと研究所へフィールドワークへ赴いた。帰路の折振り返ってみれば、大変円満かつ充実した旅であったと、深く感銘を受けた。

台湾人女性布教師とは、台湾に生まれ育ち、また講元もしくは布教所の所長、教会長の経験者の方々を指す。私は2017年の夏に「天理教台湾人女性布教師の信仰と移動経験」の研究調査を開始して以来、おぢばを訪問するまで、関係者インタビュー、関連文献と写真の収集、活動記録を行い、のべ19名の方々の信仰の生い立ちを一つ一つ記録していった。しかし彼女らがなぜおぢばへ滞在し、一体どのような日々を過ごし、自らの心境がどう変化したのかを十分浮き上がらせるには至らなかった。したがって、おぢばという空間を自分の目で見て彼女らの軌跡を確かめる必要があった。今回おぢばを訪問し初めてこの作業を実現できた。

私はまず、『みちのだい』、『海外布教伝道部報』、『海外部報』、『台湾傳道廳通訊』、『修養科月報』、『フォルモサ』、『梅華』、台湾人信者が多くいる敷島、山名、芦津大教会の教会報『敷島』、『正道』、『眞明』などの資料を幅広く閲覧することから着手した。古い各種記事の文献や写真を読むことで思いがけない発見を得た。そうした発見の連続から得た楽しみと喜びが研究の大きな原動力となった。

次に私は堀内みどり主任の手厚いサポートで、計2回の研究報告を開かせていただいた。滞在中の研究計画と研究成果をまとめるのが主な目的だ。報告会の場を提供していただいた台湾伝道史編集委員会及び研究所に感謝申し上げる。また4回にわたる研究会合は堀内主任をはじめ、海外部アジア二課の有賀善徳さんと井手勇さんお三方のご助力を得て行われた。私の発する様々な質問や理解の齟齬に対し、皆様が懇切丁寧に回答・訂正してくださったことは、私に研究の道に一人ではないことを強く実感させ心の支えになった。ここに深く感謝申し上げる。

次に私はおぢばで貴重な参与・観察する機会を数多く得たこと。6月から数えて3回の月次祭に参加した。別席と修養科の教室や廊下から、朝と夕勤めの神殿まで見学した。また敷島、山名、芦津大教会の詰所も訪ね歩き、教祖のお墓地と生家、『教祖伝』に出た多くの地名と場所（石上神宮や大和神社など）をあちこち見て回った。おぢばに滞在する間、週に3～4回神殿と教祖殿に上がって、親神様と教祖に研究日程を逐次報告する事を習慣としていた。私は天理教の信者ではないが、信者たちと同じように振る舞う中で、次第に精神が落ちつくのを感じ、親神様と教祖をより身近に感じた。私は、ほぼ毎日爽やかな朝風を迎え、自転車に乗り各詰所と教会に出かけた。途中見かける美しい漢字の看板が、私に一日の始まりを告げた。この3カ月間、偉大で壮麗な天理の世界にすっかりはまった私は、至福に包まれた旅人である。

もう一つ大きな収穫は天理教の女性観に触れたことを挙げ

られる。天理教の原典と教典を読むのは叶わなかったが、教内外の研究者がすでに発表した論文を参考しつつ、女性観の時期を定義し、教祖の時代（1838～1887）、教会設立と一派独立公認準備時代（1888～1909）、婦人会創立から終戦まで（1910～1945）、戦後復元から二代真柱様出直しまで（1945～1967）に分類した。天理教の女性観が時代ごとどのように形成・変容・再構成されていったかが、教祖、教団、信者三つの側面から論議されてきた膨大な研究成果はすでに存在している。これを読み込み体系化する作業は、目下奮闘中である。この作業の成果は天理教の女性観のみならず、天理教史を理解することにも繋がっていると確信している。また、女性観の内容を把握することを通して、間違いなく女性信者の信仰の深層まで掘り下げることに役立つだろう。

親神様と教祖からの温かいご守護とご指示をいただき、次期研究への道をすでに導いてくださったのではないかと、強く予感している。それは「天理教日本人女性布教師の台湾巡教・伝道」である。滞在中幾つかのきっかけで、これからの研究方向が曙のように見え始めた。

6月の末、偶然JR京終駅の近くに「臺北臺婦分教会」の看板を初めて見た時の驚きと喜びが今も忘れられない。後にそこは台湾伝道とゆかりのある川口ハルの教会であることを知った。山名の詰所で教会報『正道』を読んだ時、諸井春子の台湾巡教の記事がよく目に留まった。9月の初日、婦人会本部に勤務されている田中有理中河大教会会長夫人に「婦人会文庫」まで連れて行ってもらい、一般公開されていない資料や文献を閲覧させていただいた。今後、中山たまへ初代会長のみならず、川口ハルと諸井春子に関する史料がアクセスしやすくなるのではないかと希望が生まれた。また「天理教日本人女性布教師の台湾巡教・伝道」に関する研究がより一歩進む事を予感させた。今後は、中山たまへ婦人会初代会長、川口ハル臺北臺婦宣教所初代会長、諸井春子山名大教会五代会長の三女史が台湾を旅した経緯に焦点を当て、次期の実施したい。したがって、2023年の夏休みに再びおやさと研究所を訪れることを希望している。

「ジェンダーと移動研究」及び「ジェンダーと宗教研究」の両方を視点に据え、台湾人女性のおぢばがえり及び日本人女性の台湾巡教・伝道の双方を把握する。そして天理教の女性が宗教的動機に基づく移動を通して、自らの主体性をどのように構築していくのか、この一連のプロセスを丹念に解明していくことが研究目的である。この研究の意義について3点を挙げる事ができよう。（1）天理教の台湾伝道史にジェンダーの視点を加えること。（2）台湾の地域女性史に天理教を視野に入れること。山名大教会に属する布教所と教会が嘉義県に多くあることは周知の通りである。私の大学所在地が嘉義県の北部にあり、すでに把握している19名の天理教台湾人女性布教師の多くも嘉義県にいた。（3）日台の交流史と人口移動史にジェンダーと宗教の視点に重きに置くこと。この3点を明記してさらなる研究に邁進したいと考えている。

## 出土楽器が語る音の世界—骨笛—

出土楽器で最も時代が古いのは、骨で作られたものである。世界に眼をやれば、ウクライナのメジン遺跡では、マンモスの骨製楽器が一式出土している。それはヨーロッパ東部にも氷河が拡大したマドレーヌ期（約2万年前、後期旧石器時代最後の文化）のものだそう（郡司すみ『世界の音—楽器の歴史と文化』講談社学術文庫、2022年24頁）。マンモスの骨を叩いて音を出し、祭祀に使ったものと推測されている。

では、古代中国にはどのような楽器があったのか。文献資料が豊富である中国では、それに基づいて考察することになるが、それ以前の時代となると、やはり出土文物によって、その実態に迫ることになる。中国で最も古い出土楽器といえば、「骨笛」が真っ先に挙げられよう。

中国では随所で骨笛が出土しているが、一番注目されているのは、河南省の舞陽賈湖遺跡出土の25本の骨笛である。それは鶴の尺骨（翼の前腕部の骨）で作られているようだ。指で押さえるための孔の数が5孔・6孔・7孔・8孔とまちまちなようだが、最も多いのは下図にある7孔のものである（劉東昇等編・明木茂夫監修・翻訳『中国音楽史図鑑』科学出版社、東京国書刊行会、2016年）。また、賈湖遺跡は新石器時代早期のもので、いまから9000年～7800年まえの、比較的大きな規模であるが、これだけ保存状態がよく、時代が明確にわかるものは珍しく、中国でも発掘・研究が進められている。

その骨笛の研究状況は、中国の鄭州大学音楽学院長で、音楽考古研究院院長でもある王子初氏の「賈湖骨笛の“七声”研究

与東亜両河の音楽文明」（『中国音楽学』2022年第3期）に詳しく記されている。賈湖遺跡の骨笛の大々



的な調査が初めて行われたのは、1987年11月のことであり、その当時は中国音楽研究の大家である黄翔鵬氏を中心としたメンバーが、ストロボ撮影を初めとして、音高を確かめるために直接吹奏して報告書を作成したのであった。それにしても、9000年まえのものを直接吹奏するとは、なんと大胆なことであつたか、劣化を早めてしまうことは無かったのかと驚かされたりもする。当然その報告は、中国の権威ある学術雑誌『文物』に載せられた。けれども、1977年に出土した大型楽器編鐘ほどは注目されてこなかった。そしていま、第1回調査から35年も経過して、王子初氏が骨笛について論じたことは、実はすぐれて政治的な意味を含んでいる。音楽と政治が密接に関わる中国ならではと思わせられる。

先にも述べたように骨でできた楽器であれば、世界ではもっと古い時代のものが多く出土している。ここでは、「7孔」が重要ポイントとなる。それがもし中国の「宮・商・角・徴・羽・変徴・変宮」の7音階と符合していれば、「中華文明は世界中でも最も早く7音階の知識を持っていた」と言えるわけである。論文のなかで王子初氏は、習近平総書記が中国共産党中央政治局第39回学習会の折に、中華文明の長い歴史を強調し、それ

が全世界の華人の精神的な連帯を導くと話したことと言及している。7つの孔がただ開けられたものなのか、7音階の知識をもったうえでわざわざ穿たれたものであるのか、9000年前の音階知識の有無が、現在の中華文明の世界における位置づけを左右することになってしまったのである。

それゆえに2022年の時点になって王子初氏がこれについての論稿を出したのであった。そこには、「賈湖の人が7音階を理解していたかどうかは、まだ明確には判断できない」との見解が示されており、音楽考古の第一人者として、中華文明を世界最古に祭り上げたい政治家による安易な利用に抗うようである。そして、これからの研究によって「7音階」がすでに存在したかどうかを明確にしなければならないと、述べている。さて、文字による文献資料の無い時代のことになると、出土した骨笛を吹いてみるだけでなく、さらにじっくりと調べる必要がある。そこで頼りになるのが、3DプリンターやCTスキャンという現代文明の利器である。すでに「賈湖骨笛の精確復元研究」（『中国音楽学』2012年第2期）という論稿があり、中国科学院の方曉陽氏をはじめ何人もが携わった研究において、現代に復元された骨笛による音高の調査が行われていた。それが決定打にならなかったことは、先の王子初氏の論稿によっても明らかである。なぜ外観も内側もまったく同じ復元笛によってもわからないのか。まず復元したものは樹脂製であり、この素材の違いが大きいらしい。さらに大きな違いは吹く人の息の入れようにあるという。笛は息の入れようによって同じ孔を手で押さえても出る音が違う。多くの人が吹いて平均を出すよりほかなさそうであるが、ここから7音階を導き出すのは、至難の業であろう。

筆者が不思議に思うのは、これがなぜ鶴の骨で作られているかということである。このことについては何も解説がなされていない。日本語でも「鶴の一声」などと言うが、古来鶴は鳥のなかでもその鳴き声が印象的であつたらしく、「夜半ばに及びて鶴唳き、晨將に旦けんとして雞鳴く」（『論衡』卷一五變動篇）と、朝に鳴く鶏と対して語られていたり、「鳥啼きて永夕に倦み、鶴鳴きて別離を傷む」（『唐文粹』卷一七上 陳子昂「鴛鴦篇」）と、鶴の鳴き声が別離の悲しみに満ちていると詠じられたりしている。鶴は人里近くにおり、その声は、人の感情をゆさぶるものだったのであろう。また、以前に述べたことがある『韓非子』十過に、春秋時代の楽人師曠が琴を一度奏すると玄鶴が集まり、再度奏すると整列し、三度奏すると首をのばして鳴き、翼をひろげて舞ったと記載されている。春秋時代には鶴は人の奏でる素晴らしい音に応じる鳥であるとされていた。人と動物が感情のレベルでかなり通じ合っていたのであろうか。鶴の骨で笛が作られた目的は想像するしかない。鶴を呼び集めるため、あるいは祭祀のためと言われることもある。先史人は、なぜ鶴の骨で笛を作ったのか、それは何のためだったのか。音楽考古の研究はどのようにそれを突き止めるのか、今後も注目したい。それが現代の政治家への忖度でなされることがないよう期待しながら。

## 法王の辞任問題について

現ローマ法王フランチェスコは、スペインの日報『Abc』のインタビューに次のように述べている。

法王は、昨年からの右膝の痛みが増したため、入院して治療を受けた。しかし、完治するどころか、退院して以降、膝の状態はむしろ悪化したようだ。10月ごろから11月にかけてはさらに痛みが増し、公共の移動には、車椅子を使うようになった。その後、12月に入ってから膝の痛みも減ったということだが、クリスマス・イヴの儀式の様子をテレビで見ていると、例年ならば、法王自らが儀式を勤めるところを、代理人が勤めていた。

法王の辞任ということは、今日にあっては珍しいことではない。前法王ベネディクト16世は、10年近く前に「扉は開かれた」ということで、「教会内部の混乱」を理由にして、法王の職を辞した。法王辞任の問題については、1965年5月2日、時の法王パオロ6世によって署名された書類がある。現法王フランチェスコは、法王就任後に、その類の書類に署名し、時のヴァチカンの国務長官ベルトーニに渡している。その書類は、その後国務長官に就任した現カーディナル・パロリンに渡されているだろう。

フランチェスコは2013年3月13日に選出されている。ベルトーニはその年の10月の半ばまで勤めていた。その後はパロリンが国務長官の地位についている。ピオ12世もそのような書類に署名しているが、彼が署名した理由は、健康問題とか教会内部の問題とかによるものではない。当時、ナチスドイツのヒトラーによるピオ12世の逮捕、あるいはヴァチカンから他の場所へと連行すると考えられたので、その時に備えて、サインしているのだ。パオロ6世の場合には健康問題に関していた。彼は病が重く、キリストの使徒としての役目を十分に遂行できないと考えられたからだ。

法王フランチェスコの署名の理由も、パオロ6世のように、病に関係するものだった。しかし、法王は、今はまだ自分には「判断」する能力があり、「知識」もあり「良識」もあると言う。だから、今のところ、フランチェスコは法王の勤めを辞める意向はない。法王は1月31日から2月の末にかけて、アフリカのコンゴ共和国、南スーダンに司牧の旅をする予定だ。今では、法王は、膝がかなり良くなっており、膝の手術をしなくてよかったとも思っている。法王はこのインタビューの中で最後にこう語った。「いつも行動を規定するのは頭なのだ、膝ではない。私はイタリアの神父たちには『頭が正常に働く限り、前に進んで行くつもりだ』と。

## 前法王死去

前法王ベネディクト16世は、2022年12月31日午前9時34分、ヴァチカン内で息を引き取った。享年95歳。前法王は1927年、ドイツ・ミュンヘン近郊の町で生まれた。若き頃より神学に通暁し、ミュンヘンの大司教にも任命されていた。この時、彼が天理教のドイツ布教公認のために一肌脱いでくれたことは、天理教の海外布教にとっても大きな一歩となったのは、特筆すべきことであろう。

その後、法王ジョヴァンニ・パオロ2世の要請で、ヴァチカンに移住。教義聖省の長官となり、大きな業績を残した。この法王ヨハネ・パオロ2世の死去に伴い、その後のコンクラーベ

で法王に選出され、ベネディクト16世と名乗った。しかし、各種の問題が持ち上がったため、2013年2月に法王の職を辞任すると宣言した。2022年12月31日、そして年を跨いで2023年1月1日には前法王ベネディクト16世を懐かしむ声、あるいは神学者としての功績を称える声がメディアで大きく取り扱われていた。1月2日から4日まで、一般信者との最後のお別れをするためにヴァチカンのサン・ピエトロに遺体が安置され、1月5日には現法王フランチェスコによって葬儀がなされた。

## 現法王の難民についての見解

法王は、人間の生命は大事であり、その生命は救われなければならないと主張する。東南アジア、アラビア、アフリカから多くの難民たちが、地中海を渡って、イタリア、ギリシャ、スペイン、キプロス島にやって来る。出発場所はアフリカのチュニジアが中心だ。イタリア最南端のランペドゥーザはそのチュニジアから、わずか110kmのところにあるために、チュニジアから満載に積み込まれた難民が、ゴムボートに乗って大量に渡ってくるのだ。

近距離といえども、地中海も海だ。強風が吹き、海も荒れることがある。生憎その時に遭遇したゴムボートは操縦もできなくなってしまい、海に放り出される人も出てくるのだ。犠牲者がたくさん出てくるのだ。ヨーロッパ共同体(EU)は、そういう難民を救わなければならないと主張する。だが、難民たちが直面する困難となるのは南ヨーロッパの国々だ。中央から北の国々は、難民を救わなければいけない、あるいは救けるのは義務だと高言している。しかし、イタリア、ギリシャ、スペイン、キプロスなどからすれば、国力を使い、国費を使って、難民を救済しているのに、北の国々は一体何をしているのかという不満がある。ただ、難民を救え、救えと言っているだけで難民の救済や難民の自国入国に関しては知らぬふりをしているのではないだろうか。難民の多くはヨーロッパの南の国に上陸しても、そのあとは北の国々へと行きたがっているのだ。

法王はこういう傾向に警鐘を鳴らしている。難民問題は地中海に面した国の力だけでは何も解決しないのだ。中部・北部ヨーロッパの国々の手助けで、問題が解決するだろう。以前、ドイツのメルケル首相が語ったように、アフリカからの難民がヨーロッパに流れてこないように、アフリカの国々の生活レベルを向上させることが第一だ。法王もこの意見には基本的に同調している。

ヨーロッパへの難民の実態も変わってきている。かつては、難民の内訳は、アジア人、アラブ人が多かった。少し前からは、アフリカからの難民が多くなった。しかし、今ではエジプト(地図上ではアフリカだ)、そしてチュニジア、バングラデシュ、シリア、アフガニスタンと続いている。つまり、どこもかしこも政情不安定なところから、政情の安定したヨーロッパへと流れてきているのだ。難民の数も年を追うごとに増える一方だ。2020年には難民の数は3万4,134人だったのが、2022年12月27日には10万1,922人と大幅に増加している。

ヨーロッパにとって深刻な難民問題であるが、そうした中で人道的立場を貫く法王の姿勢が今後いっそう注目されるだろう。

令和5年、西暦2023年の干支は卯である。これにまつわる話題を少し述べてみたい。今や干支は、年末年始期間限定で意識向けられる程度の存在になってしまったが、博物館では今も大切なテーマであり、年初に干支にまつわる展示を開催する機会が多い。普段は収蔵庫で静かに眠っているウサギも、卯年には展示場に各種登場して、このときばかりは「二兎を追って」もらえるのである。

よく言われる干支の順序の決め方について、神様の招集を聞いた実直なウシは早めに出発し、要領のいいネズミはウシに便乗してゴールで先んじたために一番を得たのだとは中国の故事である。ネズミを責めず、踏み潰さないウシの度量の大きさには感心するが、それに続くのは中国で尊重されるトラとタツ…ではなく、タツの前にはウサギが入る。いくら「脱兎のごとく」といっても、龍には勝てないと思うのだが、これは中国の神仙思想に由来するのかもしれない。月に棲む玉兎は、白に入れた不老不死の仙薬を杵で搗く尊い存在だ(図1)。決して「兎に祭文」



図1 兎兎爺 中国 20世紀前期  
高73.5cm (天理参考館蔵)

(牛に経文、馬の耳に念仏と同じ意味)などと口にしてはならない。それでも、小学5年生でウサギの飼育係を拝命し、家からせせとキャベツを運んでは大切に育てた私としては、フワフワと可愛らしい小動物というイメージが強い。ウサギに対して同様のイメージを持つ文化人類学専攻の先輩(日本人)から、異文化なエピソードを聞いたことがある。ローマに滞在して調査を続けていた彼女

は、あるときお祭りの景品(それも驚きだが)でウサギを獲得し、可愛いでしょと周囲に見せたら大爆笑だったというのである。イタリアでウサギといえば食べるもの。柔らかい肉は大変好まれるが、野生のウサギは入手困難なために肉屋でも売っていないから千載一遇のチャンスだということに、この日本人ときたら…ということらしい。ウサギは「可愛い」ではなく、「美味しそう」と言うべきだと説教され、翌日には「日本ではウサギを食べずにペットにするらしい!」という話が笑い話として寮全体に拡散していた。「ウサギのように跳び上がる」ほど美味しいウサギ料理を一度食べさせてあげるから、それまで世話をしなさいと申し付けられたのは、ペットにするほどウサギを大切にしている日本人のその先輩だった。数週間後、彼女が慈しんで太らせたそのウサギは、トマトとワインと香料で煮込んだウサギ料理と化した。確かに柔らかくて美味だったが、今も複雑な気持ちだとは先輩の言である。

しかし、日本でも「二兎を追う者は一兎をも得ず」や「兎を見て鷹を放つ」などウサギ狩りのことわざが目につく。旧石器時代からウサギは貴重な食料だったらしい。青森県の尻芳安部

遺跡でおおよそ2万年前の後期旧石器時代に属する地層から、多数のウサギの歯が発掘されている。動物の歯の9割以上はウサギのもので、23個体分にも相当するということだ。長い年月で骨は溶け、それより頑丈な歯が残った。石器人は大型のナウマンゾウを追いかけて狩猟するダイナミックなイメージがあったが、小兵なウサギも狩っていた。その後、縄文時代の貝塚でも、シカ、イノシシに次いでたくさん出土するのがウサギの骨である。ウサギは骨が薄いために肉と一緒に叩き潰して食べた可能性が高く、実際は出土数以上だったのかもしれない。近年、縄文時代の高い人口密度を支えていたのはシカやイノシシの肉もさることながら、クリなどの植物食だったのではないかと考えられている。クリを植えて下草を刈るなど管理された里山はウサギが適応しやすい環境である。林が放置され、高木が密集して荒れてしまうとウサギは姿を消し、代わりにツキノワグマが増える。「うさぎ追ひし、かの山」の有名なフレーズ、唱歌「ふるさと」は、まさに日本のふるさとである美しい里山を表現している。

また、優しげなウサギだが、意外にも兜や刀剣の拵えなど武器武具の意匠にも多数採用されている。ウサギが上り坂は得意だが、下り坂は苦手という生態から立身出世を想定し、大きな耳から得る戦場の動きや変化に機敏に対応する能力を武士は期待したのだろう。藤ノ木古墳から出土した金銅製鞍金具にもウサギが華麗に表現されている。

図2は伏見人形の袴兎である。土人形や張子人形などの郷土人形には動物を擬人化したものがたくさんあるが、これはその典型で、日の丸扇を持ち、袴を着用した兎が凜と正座する姿を表現している。伏見人形は伏見稲荷大社門前の深草周辺で生産される土人形で、同社の祭神が鎮座する神聖な稲荷山の土を用いて作られ、参道で売られた。稲荷神は農耕の神であるため、この土で作られた人形は、たとえ壊れても田畑に入れば作物



図2 伏見人形 袴兎 京都  
昭和初期 高15.0cm  
(天理参考館蔵)

の出来が良くなる、土に帰ると尊ばれた。そのため江戸時代には参詣者が土産物として各地に持ち帰り、伝播した結果として全国の土人形の成立に大きな影響を及ぼすことになった。このモチーフにもウサギは登場する。ピンと立った大きな耳がまさか角に見えることはあるまい。「兎に角」の「兎角亀毛」とは仏教語に由来する言葉だ。ウサギに角、亀に毛がないように、現実にはあり得ないことを意味する。もっとも、甲羅の後ろに毛をなびかせて泳いでいる亀は長寿の吉祥として古来しばしば描かれているし、現代のポケモンでもゼニガメが進化したカメールはお尻にふさふさとカールした毛を持つ。とにかく(いづれにせよ)、苦しい下り坂を脱兎のごとく駆け、得意の上り坂でも毛の生えた亀に油断して眠りこけたりせずに、最善を尽くす一年としたいものだ。

# 「碍」の字表記問題再考 (23) 仏教にみる障害者像

## 『法華経』

『法華経』は釈尊の72歳から80歳までの8年間にわたって説法したものをまとめたものである。内容的には、釈尊に救いを求めてきた人々に対して説いた「随他意の経典」とは異なり、釈尊自身がみなに伝えておかなければならないことを説いた「随自意の経典」である。釈尊の入滅後、500年頃に多くの弟子たちによって編纂された『法華経』は、サンスクリット語で「サダルマ・プンダリーカ・スートラ」と言い、「真実のあり方」「白い蓮華」「それを編んでいる糸」という3つの言葉をつないで付けられた経典を漢訳したものである。

釈尊の説法は、人々の理解度に応じて比喻を多く用いて説いている。分かりやすく、親しみのある内容であるといわれ、すべての人間の救済を説き、その救済の意味を懇々と説いている。

最初に翻訳された『正法華経』は、中国西晋時代(265年～316年)の286年に竺法護によって漢訳されている。竺法護は敦煌出身の翻訳家であり、この『正法華経』は梵本の原文を中国語に翻訳したものを他の者が文章化したものである。10巻27品から構成され、内容的には後から追記された箇所が多く、翻訳自体に正確性を求めるあまりに文章が難しいとされている。ここでいう「品」とは、「章」という意味である。

その後、406年に鳩摩羅什が漢訳した『妙法蓮華経』があり、7巻27品の章立て(後に8巻28品)となっている。厩戸王が撰述した『法華経義疏』はこれを基にしたものである。

601年には『添品妙法蓮華経』7巻27品が闍那崛多、達摩笈多によって翻訳されている。この『添品妙法蓮華経』は鳩摩羅什の『妙法蓮華経』を補訂したものである。

漢訳本は全部で6つあったが、「六訳三存三欠」といわれ『正法華経』『妙法蓮華経』『添品妙法蓮華経』の3つが現存し、『薩芸芬陀利経』『法華三昧経』『三車誘引火宅経』は消失している。

鳩摩羅什の『妙法蓮華経』は「序品第一」「方便品第二」「譬喻品第三」「信解品第四」「葉草喻品第五」「授記品第六」「化城喻品第七」「五百弟子授記品第八」「授学無学人記品第九」「法師品第十」「見宝塔品第十一」「提婆達多品第十二」「勸持品第十三」「安樂行第十四」「從地涌出品第十五」「如来寿量品第十六」「分別功德品第十七」「隨喜功德品第十八」「法師功德品第十九」「常不輕菩薩品第二十」「如来神力品第二十一」「囑累品第二十二」「葉王菩薩本事品第二十三」「妙音菩薩品第二十四」「觀世音菩薩普門品第二十五」「陀羅尼品第二十六」「妙莊嚴王本事品第二十七」の章立てとなっている。

## 障害の表記

障害の表記については、「譬喻品第三」に多く記述がみられる。この章の内容は第2章の「方便品」の続きとして教えが説かれている。第2章では、釈尊が弟子の舍利弗に教えを説くものの、その教えがなかなか理解されず、よりわかりやすい説法を懇願した舍利弗に対して譬喻を用いて語ったのが第3章である。ここに登場する舍利弗とは、釈尊の十大弟子の一人である。

第3章は譬喻を用いて説かれた章であり、その中に「障礙(碍)」の表記が確認できる。その記述は次の通りである。

見諸子等安隱得出。皆於四衢道中露地而坐。無復障礙。其

心泰然歡喜踊躍。

障碍の表記については、文化庁の国語審議会が示すように仏教用語として存在し、本稿では『維摩経』で確認し、『法華経』においても再度確認することができた。意味は、「さまたげ。とくに、仏の悟りをうるための仏道修行の邪魔をするさわり。また、悪魔、怨霊などによるさまたげ。」(『例文仏教語大辞典』)などとなっている。

次に身体障害の人たちに関する表記が次の文言である。

驢駘無足宛轉腹行為諸小蟲之所啖食晝夜受苦無有休息謗斯經故獲罪如是若得為人諸根閹鈍癡癩聾盲背偻有所言說人不信受口氣常臭鬼魅所著貧窮下賤爲人所使多病瘠瘦無所依怙雖親附人人不在意若有所得尋復忘失若修醫道順方治病更增他疾或復致死若自有病無人救療設服良藥而復增劇若他反逆抄劫竊盜如是等罪橫羅其殃如斯罪人永不見佛衆聖之王說法教化如斯罪人常生難處狂瞽心亂永不聞法於無數劫如恒河沙生輒聾瘡諸根不具常處地獄如遊園觀在餘惡道如己舍宅駝驢猪狗是其行處謗斯經故獲罪如是若得為人聾盲瘡瘡貧窮諸衰以自莊嚴水腫乾疥疥癩癰疽如是等病以爲衣服身常臭穢穢不淨深著我見增益嗔恚欲熾盛不擇禽獸謗斯經故獲罪如是

是 〃は筆者が強調(簡約 三枝充『法華経現代語訳(全)』より)

仏が世界におられる間に、もしくは入滅されたあとに、このような経典をそしり非難するものがある場合には、あるいは経を読誦し、書き、保持するものがあるのを見て、そのものを軽んじて賤しめ、憎みそねんで、長い間の怨みをいまくものがあるならば、このものが罪にあたる報いを。なんじよ、いま聴きなさい。そのようなものは、命が終われば、阿鼻地獄に入るであろう。たとえ地獄から出られても、必ず畜生道に墜ちるにちがいない。もし犬が野千となれば、その形は色がはげで、やせており、色が黒く、疥・癩というできものができていて、人間にもあそばされ、あるいはまた人間から賤しめられ、つねに飢えとのどの渇きに苦しんで、骨も肉もやつれはてるだろう。仏となり得る種子を断ちきってしまうがゆえに、この罪となる報いを受けるのである。

さらに麟の身体を受け、その形は長大であり、五百由旬(ヨージャナ)もある。この動物は足がなく、くねくねと腹ばいして行き、昼も夜も苦しみを受けて、休息するひまもない。

もしも人として生まれることができたとしても、多くの素質はくらくにぶくて、聾、盲、聾、背偻となるであろう。何か口にして説くところがあっても、ひとは信じて受け入れようとはしない。口から出る息はつねに臭くて、鬼魅にとりつかれており、貧乏で困窮し、下賤であって、他人に使われ、多くの病があつて、やつれて、やせており、たよるところがない。たとえだれかの人に親しく、くっついていても、その人は、かれのことなど心においていない。

一部分を紹介したが、凄まじい内容である。

## [引用・参考文献]

三枝充『法華経現代語訳(全)』第三文明社、1978年。

菅野日彰『法華経・永遠の教え』大法輪閣、2006年。

## 第5講：119 「遠方から子供が」

逸話篇 119 「遠方から子供が」に対して、①「子を思う親心」②「待つ」ということ③「遠方から」という3つの観点から考察をしていく。

\* \* \*

## ①子を思う親心

天理王命は人類の「生みの親」であり「育ての親」でもある。また、その教えを私たちに明かされた教祖を「おやさま」と呼んでいる。天理教の人間観は、この親と子のつながりが基本になっている。親の立場である教祖は、この逸話のように常に子どもの帰りを楽しみに待っている。

他の逸話でも、8「一寸身上に」では、教祖は「よう帰って来たな。待っていたで。」と、お屋敷に来た西田コトを迎えている。また10「えらい遠廻りをして」の逸話では、榊井キクは教祖から「待っていた、待っていた。」と言われている。どちらの話でも初めての参詣だが、教祖は子どもが帰ってくるのを以前から待ちわびていたかのようにして迎えられている。33「国の掛け橋」でも、山本利三郎は「今日か明日かと待っていたのやで。」と言って迎えられた。

神が人類の親であるなら、私たちの生活は、神による壮大な「子育て」のなかにあるとも言えよう。親は常に子どもの成人を待っている。その成長を願っている。そのために、ときには厳しく、ときには優しく接するのは、私たちの子育てと共通する。神は旬刻限が来るのを待って、言い換えれば子どもが理解できるようになるまで待ってから、ようやくその産みの親の真実を明かし、人類の元の親の存在と創造の意図を教えられた。

## ②「待つ」ということ

「待つ」という言葉には、時間の経過のなかで待つ対象に対して「期待」や「楽しみ」といった意味が含まれている。このことは、前述の「子を思う親心」と通底する。子どもの成長には長い時間を要するのは言うまでもない。また決して簡単なことでもない。じっくりと時間をかけて、そして何よりも成長を楽しみながらなされるものである。壮大な人類の子育てのなかで、神は常に私たちの成人を楽しみに待っておられる。

また、「待つ」と言えば、教祖は「まつりというのは、待つ理であるから、二十六日の日は、朝から他の用は、何もするのやないで。この日は、結構や、結構や、と、をや様の御恩を喜ばして頂いておればよいのやで。」（『逸話篇』59）と言われ、まつりは「待つ理」と教えられる。つまり祭典を「楽しみを持って待つ」という姿勢が問われている。視点を変えていうなら、祭典までの時間の経過のあり方が問われているのではないだろうか？

ところがグローバル化が進む今日、いつでも、どこでも、誰とでもつながる社会になってきた。それと同時に「待たない」あるいは「待たせない」風潮にもなっている。少しでも「早い」ことを目指し、何でもスピード化されている。例えば乗り物などもスピードアップが問われ、旅行などは「早く目的地に着く」ことが重要視されている。

そもそも旅とは、目的地に着くことが目的ではなく、その行き帰りの道中もまた旅の一つだった。今回の逸話でも、主人公の4人が道中で「にをいがけ」をされたという記述が残ってい

る。大阪から大津までは汽車、琵琶湖を小蒸気船で渡って、その後遠州までは歩いて行ったが、道中では十二下りを歌いながら歩いていた。

現代社会がこの逸話の時代のような生活リズムに戻ることはできないが、それでも何か時間をかけるということを考えてもいいのではないだろうか。また、目的に早く達することだけではなく、その目的に向かってどのように時間を過ごすのかという姿勢が問われている。教内におけるさまざまな行事やイベントなども、その開催だけが目的ではなく、それに向かってどのように日々を過ごすのかという点も重要ではないだろうか。「待つ理」のお言葉にはそうしたことも含まれていると感じられる。

## ③遠方から

この逸話の「遠方」は現在の静岡県（遠州）のこと。旅と言えばまだまだ徒歩が中心だった。他の逸話篇のなかでも、遠方から何キロも歩いて参詣した話が少なくない。徒歩では到着するまでの道中でさまざまな出会いもあったのではと想像できる。そしてその出会いからこの道に導かれたり、導いたりした事例も多い。

その一方で、教祖はすでに現代のような状況を予言されている。175「十七人の子供」の逸話は「今は、阿波国と言えは遠いようやが、帰ろうと思えば一夜の間にも、寝ていて帰れるようになる。」と言われている。昨今、移動手段や通信手段が進歩するなかで、かつての「遠方」がそうではなくなってきた。

教祖50年祭の際、ブラジルからの初めての団参は64日かけての船旅だった。海は荒れ、乗客の多くが船酔いで苦しんだ。団長の大竹忠治郎は「あなた方は世話をしてくつもりで乗られたか。お世話させて頂くつもりで乗られたか。（中略）少なくとも道の者は世話をさせて頂くという心、すなわちこの船はひのきしん船といわれるぐらいつとめ切らさして頂くのではないか。」と信者たちを鼓舞し、それ以降、彼らは他の乗客や乗組員にさまざまな世話をした。下船の際「かような団体は初めてです」と船長が団体に賛辞を贈られた。おぢばがえりも着くことだけが目的ではなく、その道中でどのように振る舞うのかということも重要であると示唆している話である。

今日のグローバル社会では、「遠方」とは単なる距離的な遠さだけが問題ではない。とくに経済格差は「距離」をつくる大きな要因の一つである。そしてこの格差は近年、国内だけに限らず世界規模でますます大きくなってきている。先進国である日本と発展途上の国とでは、物価や就職、治安など、さまざまな面で異なっている。そうした「遠方」に住む、あるいはおぢばがえりが困難な人たちに、どのようにこの親の教えを届けるのか、「世界たすけ」を進める上で決して避けられない問題ではないだろうか。

\* \* \*

親神様は子どもの成人を常に待っておられる。子どもが帰ってくるのを心待ちにしておられる。それがまして「遠方から」なら、より待ち遠しいことに違いない。今日、さまざまな事情を抱えつつおぢばがえりをした人たちに対し、教祖はどのようなお言葉を下されるのか分からないが、教祖に代わって、この逸話にあるように、教祖がわざわざ残された「お餅」に表されるような心遣いを忘れないようにしたいと感じる。

## 第6講：126 「講社のめどに」

おやさと研究所主任  
堀内 みどり Midori Horiuchi

## 126 講社のめどに

明治十六年十一月（陰曆十月）御休息所が落成し、教祖は、十一月二十五日（陰曆十月二十六日）の真夜中にお移り下されたので、梅谷四郎兵衛は、道具も片付け、明日は大阪へかえろうと思って、二十六日夜、小二階で床についた。すると、仲田儀三郎が、緋縮緬の半襦袢を三方に載せて、「この間中は御苦勞であった。教祖は、『これを、明心組の講社のめどに』下さる、とのお言葉であるから、有難く頂戴するように。」とのことである。すると間もなく、山本利三郎が、赤衣を恭々しく捧げて、「『これは着古しやけれど、子供等の着物にでも、仕立て直してやってくれ。』との教祖のお言葉である。」と、唐縮緬の単衣を差し出した。重ね重ねの面目に、「結構な事じゃ、ああ忝ない。」と、手を出して頂戴しようとしたところで、目が覚めた。それは夢であった。

こうなると目が冴えて、再び眠ることが出来ない。とかくするうちに夜も明けた。身支度をし、朝食も頂いて休憩していると、仲田が赤衣を捧げてやって来た。

『『これは、明心組の講社のめどに』下さる、との教祖のお言葉である。』

と、昨夜の夢をそのままに告げた。はて、不思議な事じゃと思いつつ、有難く頂戴した。すると、今度は、山本が入って来た。そして、これも昨夜の夢と符節を合わす如く、

『『着古しやけれど、子供にやってくれ。』と、教祖が仰せ下された。』

と、赤地唐縮緬の単衣を眼前に置いた。それで、有難く頂戴すると、次は、梶本ひさが、上が赤で下が白の五升の重ね餅を持って来て、

「教祖が、『子供達に上げてくれ。』と、仰せられます。」

と、伝えた。四郎兵衛は、教祖の重ね重ねの親心を、心の奥底深く感銘すると共に、昨夜の夢と思ひ合わせて、全く不思議な親神様のお働きに、いつまでも忘れられない強い感激を覚えた。

講座では、まず梅谷四郎兵衛の略歴を紹介。その上で、『逸話篇』の中の梅谷を概観し、「126 講社のめどに」の逸話を「赤衣」と「めど」に注目した。

## 梅谷四郎兵衛と『逸話篇』

梅谷は、弘化4年梅谷久兵衛門・小きんの三男勝蔵として大阪で誕生し、数え14歳の時、親戚筋の「左官四郎」浦田小兵衛の養嗣子となり、四郎兵衛を名乗った。その後、養父の出直しの時、梅谷に復籍し分家した。実の兄の眼病快癒のために薬を調達するなどしていたが、弟子の巽徳松の父との雑談中に、教祖のことを聞き、早速おぢば参詣を決意。徳松とともに参詣した時、取次から話を聞き、入信を決意。その10日後には7～8名と共におぢばに帰り、3度目には30名を連れての帰参となったという。「かんろだい」の「石出しひのきしん」、「御休息所」の「壁塗りひのきしん」に励み、明治15年10月と19年2月の教祖御苦勞のときは差し入れをし、妻のたねは「陰膳」をして教祖の無事を願った。そして、明治16年教祖が御休息所にお移り直後、赤衣を拝戴した。

このように梅谷は非常に熱心な信仰者であったことは間違い

なく、また、夫婦で教祖を慕っていた。『逸話篇』の14篇の逸話は梅谷が伝えるものである。

梅谷が教祖の様子やお言葉を伝えている逸話には、「5 流れる水も同じこと」「19 子供が羽根を」「22 おふでさき御執筆」があり、「82 ヨイショ」「92 夫婦揃うて」「107 クサはむさいもの」「117 父母に連れられて」「123 人がめどか」「126 講社のめどに」「159 神一条の屋敷」「170 天が台」「184 悟り方」「198 どんな花でもな」は、梅谷および家族が教祖からお言葉をいただいている。

## めど（目処、目標）ということ

126「講社のめどに」は、①梅谷四郎兵衛の「夢」が実現して、②教祖から赤衣を頂き、③それが「講社のめど」と「子どもの着物」になるという内容となっている。「おふでさき」には、

どのよふなゆめをみるのもみな月日

まことみるのもみな月日やで 十二号 163

どのよふなゆめをみるのも月日なり

なにをゆうのもみな月日やで 十四号 1

と、教えられ、この逸話では、夢に見たままのことが実現し、その不思議さは驚くばかりである。では、教祖は、なぜ「赤衣」を「講社のめどに」するようになされたのか。また、子どもに赤衣や餅を下されたその親心はどのようなものであるのか。「126 講社のめどに」の逸話を「123 人がめどか」と合わせて味わうと、信仰のめど（目処・目標）は「神」にあること、赤衣はその神そのもの、教祖あるいは教祖の代理であることが了解される。また、赤衣を講社のめどとすることで、講社の人々と共にする信仰のめどが神にあるという信仰の方向をしっかりと示されている。さらに、この逸話を「92 夫婦揃うて」「117 父母に連れられて」とともに味わうと、夫婦で進めていく信仰のありようが示される。教祖のおもいが子どもに伝えられていくことにさらなる信仰の喜びがあるともいえよう。夫婦親子での信心のありがたさが伝わる。

## 赤衣がめどに

教祖が、初めて赤衣をお召しになったのは、明治7年12月26日であり、その日のことは「35 赤衣」に記されている。赤衣は、主に「めど」として下さる、おたすけのために下さる、子どもに下さるということがあった。今回の逸話のような例は、例えば「これを、信心のめどにして、お祀りしなされ。」（天元講に「43 それでよかるう」）がある。人々の心が信心へと固まったとき、教祖は赤衣を下さった。また、「51 家の宝」や「121 いとに着物を」の逸話では、教祖は子どもであった亀松といく系に赤衣を下さり、その赤衣は信仰の「めど」として、「家の宝」となり、「お社に」祀られた。

こうしてみると、赤衣を講社のめどにするということは、「神をめど」に信仰することを日々意識する。自らの信仰の目処にすること（「123 人がめどか」）だけではなく、他の人のたすけの目処、共に信仰する時の目処でもある、どこに向かって信仰しているのかを間違えないようにと教えてくださっていると見えよう。そして今日では、願えばいただける「証拠守り」の赤衣を通して教祖の親心や温もりを実感できる。

第 354 回研究報告会 (12 月 12 日)

「イスラームにおける信仰・戒律・ビジネスの融合—ハラール食品産業とイスラーム法の結びつきから—」

桐原 翠 (日本学術振興会特別研究員 PD、立命館大学)

本報告は、近年世界的に広がりを見せているハラール (食品) 産業を取り上げ、ハラール産業の実態、ハラール産業の形成と勃興を、現代イスラーム世界の信仰・戒律・ビジネスに関連づけて明らかにすることを目的としている。これまで、マレーシアを筆頭に拡大を続けてきたハラール産業は、世界各地に拡大し急成長を遂げてきた。そのため、ハラール産業への認知度は、ここ数年で格段に向上しているものの、ハラールに関する学術的な研究分野は未整備であると考えられる。そのことは、ハラール産業の誕生と拡大という現象の性質を捉えきれていないことに起因すると言える。ハラール食品産業が、様々な観点から構成されていることを考えると、多様な視点からの考察が重要である。そこで、今回は、特に、マレーシア、ドバイ、トルコのハラール・エキスポの事例を取り上げ、信仰・戒律・ビジネスの視点から、ハラール産業の実態やその性質を考察する。

本報告は、地域研究の立場から、マレーシアのハラール産業の成り立ちを捉え、イスラームという宗教を考察し、現代イスラーム世界におけるハラール産業の今後の可能性について新たな視点を提供するものである。

なお、この研究会は本年度の第 1 回宗教研究会を兼ねて開催した。

「国際会議：井筒俊彦の東洋哲学を再定置する」を開催 (12 月 17、18 日)

澤井 真

「国際会議：井筒俊彦の東洋哲学を再定置する」(International Conference Reframing the Oriental Philosophy of Toshihiko Izutsu) を、国立民族学博物館を会場に開催した。日本の各大学に所属する研究者や、カナダ、オーストラリア、そしてトルコの大学に在籍する海外研究者らが対面とオンラインで参加した。コロナ禍であることを考慮し、発表者やディスカッサント以外の参加者は原則オンライン参加となった。

会議自体は 6 セッション 12 発表に加えて、2 日目午後にはアルマンド・サルバトーレ氏 (カナダ・マギル大学) によるオンラインの公開講演「宗教間の世界市民主義—東洋と西洋の交わりを通して」が行われた。会議では最新の同時通訳システムが導入され、オンラインに接続すれば、参加者は日本語か英語かいずれかの言語で発表を聴講できた。

天理大学からは、山川仁「井筒俊彦『言語と呪術』における「内包的意味」のロッキ的・パークリのな諸側面」、ファン・ホセ・ロペス「哲学的翻訳—オルテガの翻訳理論と井筒の言語哲学からの視座」、澤井真「イスラーム哲学から東洋哲学へ—イスラーム研究者としての井筒俊彦」(いずれも英語発表) があった。多くの発表が英語発表あるいは英語翻訳で発信されたことにより、海外研究者にも関心が高い井筒俊彦の思想を発信することができた。

なお本会議は、科学研究費「井筒俊彦の思想形成期における東洋思想とその学問的視座」(20H01199 研究代表者:澤井真) が 3 年の研究期間の集大成として、国立民族学博物館グローバル地域研究プログラム (グローバル地中海地域研究拠点・プログラム総括班)、天理大学おやさと研究所、マギル大学キナーン宗教間研究講座との共催で実施したものである。

## 2022 年度おやさと研究所 特別講座「教学と現代」

### 「元の理」を描く —生命・ジェンダー・芸術—

2022 年度の特別講座「教学と現代」は、天理人間学研究室と天理ジェンダー研究室との共催により、『「元の理」を描く—生命・ジェンダー・芸術—』をテーマに開催いたします。

講師に、2022 年 9 月に南右 2 棟で「元の理」を題材にした日本画の個展「いのちのいさい」展を開催された日本画家の村田和香氏をお招きして、「元の理」の芸術世界について講演をいただきます。

【演題】「元の理」を描く

—生命・ジェンダー・芸術—

【講師】村田和香 (日本画家、グループ「台」会員)

【コメンテータ】金子珠理 (同志社大学嘱託講師)

【開催日時】2023 年 3 月 25 日 (土)

14:00 ~ 16:00

【会場】天理大学研究棟第 1 会議室

\* 当日は、天理大学研究棟西口 (自動ドア) からお入りください。

グローバル天理

第 24 巻 第 2 号 (通巻 278 号)

2023 年 (令和 5 年) 2 月 1 日発行

© Oyasato Institute for the Study of Religion  
Tenri University

発行者 井上昭洋

編集発行 天理大学 おやさと研究所

〒632-8510 奈良県天理市杣之内町 1050

TEL 0743-63-9080

FAX 0743-63-7255

URL <https://www.tenri-u.ac.jp/oyaken/index.html>E-mail [oyaken@sta.tenri-u.ac.jp](mailto:oyaken@sta.tenri-u.ac.jp)

印刷 天理時報社

Printed in Japan